

日本オーステイン協会第13回大会プログラム

- 日 時：2019（令和元）年6月29日（土） 受付：11：00より
- 場 所：神戸女子大学 三宮キャンパス 教育センター 特別講義室（5階）
（〒650-0004 神戸市中央区中山手通 2-23-1（生田神社のすぐ北側））
※JR神戸線および阪急神戸線「三ノ宮」駅から徒歩15分。
※大学ホームページ（<http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/access/index.html>）ご参照のこと。
- 参加費：日本オーステイン協会会員：無料
当日会員（上記会員以外）：一般1,000円、学生500円（当日受付で支払い）

- ◆ 開会の辞（11：30～11：35）
久守 和子（日本オーステイン協会会長・フェリス女学院大学名誉教授）
- ◆ 研究発表（11：40～12：10） 司会： 惣谷 美智子（神戸海星女子学院大学教授）
発表者： 岡本 由恵（安田女子大学助教）
『『エマ』と『教授』に見られる主人公の〈出会い〉
——ジェイン・オーステインとシャーロット・ブロンテとの描写比較』
- ◆ 総会（13：20～13：50）
- ◆ シンポジウム（14：00～16：15）
テーマ： 「オーステイン流の処世術——生き方、書き方」
司会・講師： 馬淵 恵里（関西外国語大学准教授）
講師： 土平 紀子（神戸大学非常勤講師）
講師： 中村 裕子（神戸大学非常勤講師）
講師： 仙葉 豊（大阪大学名誉教授）
- ◆ 特別講演（16：30～17：40）
講 師： 岩上 はる子（滋賀大学名誉教授）
タイトル： ジェイン・オーステインは世界文学たりうるか？
司 会： 高桑 晴子（お茶の水女子大学准教授）
- ◆ 閉会の辞（17：40～17：45）
- ◆ 懇親会（18：00～20：00）
場 所： 萬壽殿（中国料理、<http://www.manjuden.com>）
（神戸市中央区中山手通 2-20-4、大会会場から徒歩2分程度）
会 費： 5,000円

問合せ先： 日本オーステイン協会事務局
〒790-8578 松山市文京町 4-2 松山大学新井研究室内
E-mail: harai@g.matsuyama-u.ac.jp

日本オースティン協会第 13 回大会発表レジュメ

【研究発表】

『エマ』と『教授』に見られる主人公の「出会い」
——ジェイン・オースティンとシャーロット・ブロンテとの描写比較

岡本由恵（安田女子大学助教）

シャーロット・ブロンテは、G.H.Lewes宛ての手紙の中で、『エマ』について、読者の心を揺さぶるような激情もなければ情熱も感じられないと、オースティンの手法を中国の細密画（Chinese fidelity）に例え批判している。人々の日常を精密に描写しているに過ぎないというのである。ブロンテは当時 34 歳、代表作『ジェイン・エア』を 3 年前に出版し、職業作家としての地位をすでに確立していた。

ところが、ブロンテが『ジェイン・エア』以前に執筆した小説『教授』には、『ジェイン・エア』に見られるような劇的プロットはない。狭い場所を舞台に数人の登場人物の内面を細かく描写する、むしろリアリズムの傾向の強い作品である。ブロンテは『教授』の出版を試みるものの、9 回拒否され、結局死後出版となった。しかし、ブロンテ自身に『教授』に対する深い思い入れがあったことは、生涯最後の作品『ヴィレット』執筆直前まで、筆を入れていたことから想像できる。

リアリズム作品といってもよい『教授』を擁護する一方で、『エマ』を批判するブロンテの『教授』には、ブロンテのいう、人の心を揺るがず激情があるのだろうか。ブロンテの『教授』の人物描写の手法は、『エマ』のものと同様異なるのだろうか。

『教授』と『エマ』では、いずれも精神的孤立状態に陥った主人公が様々な出会いを経験し傷つきもするが、尊敬と信頼と愛情を抱く相手を受け入れ、結婚に至る。主人公の性別も性格も、そして地位や境遇も全く異なる 2 作品であるが、作中、主人公が出会う人々を受け入れ、関係を築く過程の心理描写は共に豊かに描かれる。本発表では、この他者との出会いと受容、そして関係性の形成という 2 作品に共通するテーマを軸に、それぞれの描写を比較検討し、ブロンテの『エマ』批判の妥当性を考えることとしたい。

【シンポジウム】

オースティン流の処世術——生き方、書き方

司会・講師 馬淵 恵里（関西外国語大学准教授）

講 師 土平 紀子（神戸大学非常勤講師）

講 師 中村 裕子（神戸大学非常勤講師）

講 師 仙葉 豊（大阪大学名誉教授）

2017 年に没後 200 年を記念して新たに 10 ポンド紙幣の顔となったジェイン・オースティン。イギリス史にその名を刻む多くの著名人の中から紙幣の肖像画に選ばれたことは、現代社会における彼女の知名度と人気の高さを物語っているだろう。この四半世紀だけでも、オースティンの評伝、オースティン小説の翻案および続編、さらにはオースティンや彼女の作品にインスピレーションを受けて執筆された作品が次々に出版・公開され、オースティンと彼女の作品は存在感を放ち続けている。

1811 年のデビューから数えるとわずか 6 年というごく短い小説家としてのキャリアにもかかわらず、オースティンはなぜこのように「生き長らえる」ことができたのか。もちろん、生前の彼女にそのような意図があったかどうかは定かではない。とはいえ、オースティンが一人の人間として、あるいは作家として、世の中で暮らしてゆくことをどう捉えていたのかを、彼女の実生活や著述から考えてみることは案外意味のあることかもしれない。そこで本シンポジウムでは、オースティン流の「処世術」なるものを、当時の思想や文化的背景、同時代の

文学作品、さらには後世の作家や作品などを視野に入れながら、主に彼女の「生き方」と「書き方」という観点から、フロアとともに広く考察してみたい。

折り合いをつけながらわが道を行く面々

土平 紀子

Jane Austen の長兄 James は、父の仕事を引き継いだものの、牧師の置かれた状況が父の頃とは大きく変わってしまったことを詩の形で書き残している。また、かつて父も所属していたキリスト教知識普及協会 (The Society for Promoting Christian Knowledge) の会合では、Jamesはどうしても譲れない自らの主張を展開した上で、聖書協会 (The Bible Society) に団結を呼びかけたが、主張は矛盾を内包していた。一族の面々のSPCKへの支援も一枚岩ではなかった。福音主義者の従兄の説教集を嫌ったJane Austenも、福音主義を全否定しているわけではない。このたびの発表では、Irene Collins の研究をもとに、このようなすっきり割り切れない状況と人々の思惑に注目しながら *Mansfield Park* を読み直したい。

Jane Austen と Hannah Cowley における「コケにされた男の正しいコケ方」

中村 裕子

Jane Austen の小説と芝居との関連は内容と技法の両面で思いのほか深く、これまでも数々の批評家によって、当時人気のあった芝居の筋や登場人物、有名な役者、演技法などの影響が諸所に見られることが明らかにされてきた。こういった研究に続くものとして、本発表では、*Pride and Prejudice* を中心に Austen の小説における芝居的側面についてあらためて検討していく。特に、1770 年代後半から 1780 年代の前半にかけて Drury Lane Theatre や Covent Garden Theatre を大いに賑わせ、19 世紀に入っても人気の演目として数々の劇場で演じられ続けてきたことで知られる Cowley の芝居 (とりわけ、*Who's the Dupe?*) に注目し、それらと Austen の小説を比較する。両者の作品には、愚かさや思い上がりが原因で笑いの種とされる男性がたびたび登場するが、それらの人物に焦点を当てることで、お定まりの登場人物 (stock character) が生み出す効果や笑いについて考察していきたい。

オースティン流の「書き方」——小説の技法と形式をめぐって

馬淵 恵里

オースティンが、詳細な内面描写を通して作中人物を内側から描き上げる書簡体小説の技法と、叙事詩の伝統を汲む作中人物の言動を解説・批評しながら客観的に描き出す三人称小説の技法という、18 世紀小説にみられる 2 つの流れを上手く統合したというのは、小説の歴史からオースティンを捉える場合の定説といってよいだろう。それでは実際にどのように統合した (あるいはしようとした) のか、改めてその具体的な跡や証を探りながら 6 つの長編小説を読んでみると、オースティンの目標や試みは (当然ながら) 作品ごとに異なっており、小説というジャンルそのものが発展途上にあった時期に、彼女自身も自分のスタイルを探求し続けていたことがわかる。本発表では、主に *Pride and Prejudice* 以降の作品を取り上げ、可能であればヴィクトリア朝の後続作家とも関連づけながら、オースティン流の「書き方」について今一度考えてみたいと思う。

漱石とオースティン——「則天去私」をめぐって

仙葉 豊

夏目漱石は、大正 4 年 12 月に亡くなる直前の 11 月に、弟子たちとの面会日であった木曜会で、「則天去私」というその時の彼の心境を吐露したという。漱石が最後にたどり着いたというこの「則天去私」という言葉には、彼の最後の解脱という神話と、その神話の偶像破壊に至るまで、様々な解釈が生じているが、その木曜会で、「則天去私」の具体的な例はと弟子たちに訊かれて漱石は、「オースティンの『プライド・アンド・プレジューディアス』など」(松岡讓『漱石先生』) を挙げたという。漱石が絶筆となった『明暗』書きながら、一方で、オースティンについて考えていたことは極めて興味深いことだと思われる。この発表では、「則天去私」の概念をめぐって、オースティンと『明暗』について考えてみたい。

【特別講演】

ジェイン・オースティンは世界文学たりうるか？

岩上はる子（滋賀大学名誉教授）

大仰な問いを掲げたものの、それに対する答えはまだ見通せてはいない。けれども答えに代えて、こんな大風呂敷を広げた背景について説明しておきたい。今世紀に入ってグローバル化のいっそうの進展とともに、国・地域、言語・文化を越境する、新たな「世界文学」という概念が注目されている。また、多言語による世界文学と切り離すことのできない「翻訳」についても、これまでの言語的な移しかえから、いわば「文化論的転回」を遂げ、その内容は文化研究へとシフトしつつある。このように批評の枠組が大きく変わろうとしているなかで、優れて英国的（国民文学？）と思われるジェイン・オースティンについて、世界文学の視点からの読みは可能だろうか、という問いを投げかけたい。

明治以来、日本の西洋文学受容は翻訳によって支えられてきた。それが「中心」から「周縁」への方向性のものであり、その受容には植民地主義的なイデオロギー性が含まれていたことも、正木恒夫や齋藤一などによって明らかにされた。フェミニズムやポストコロニアリズムを経た現在、新たな世界文学論を牽引しているデイヴィッド・ダムロッシュは「世界文学は、翻訳であれ原語であれ、発祥文化を超えて流通する文学作品をすべて包含する」（秋草俊一郎他訳、国書刊行会、p. 15）と定義している。さらに、翻訳を原典に対して二次的なものではなく、世界文学を成り立たせる前提と考え、翻訳を通して失われるものよりも新たに得られるものを認め、「世界文学は、翻訳を通して豊かになる作品」（p. 432）と再定義してみせる。

日本でジェイン・オースティンと並んで早くから翻訳の出されたブロンテを考えてみよう。『嵐が丘』として邦訳された *Wuthering Heights* は、今日では優に 20 種類を超える翻訳が出され、映画・舞台・ミュージカル・マンガなど、多種多様な形態のアダプテーションを生んでいる。マンガの『ガラスの仮面』によって『嵐が丘』を知ったという逆方向の受容さえある。*Sense and Sensibility* あるいは *Pride and Prejudice* を邦訳することで<何かが失われた>にちがいないのだが、その一方で、何が<新たに>付け加わったのか、翻訳によってオースティン作品がどのように豊かになったのか？ ダムロッシュの言う「楕円の屈折」を見いだせるのではないだろうか。この思いつきを支えるのは「世界文学は、じつはあなたがそれをどう読むか」によって生成されていくものという主張である。

空中分解する可能性大ながら、終点は見えている。問いかけに始まる講演の締めくくりは、やはり問いかけである。「さて、あなたは、ジェイン・オースティンをあなたの世界文学に入れますか？」

【交通アクセス】

